ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

December 15, 2008, No. 25

【役員名簿（2008-2010）】
代表：村上清敏（金沢大学）
副代表：喜納育江（琉球大学）
顧問：伊藤詔子（広島大学名誉教授）
上遠恵子　西村頼男（阪南大学）
事務局長：小谷一明
（県立新潟女子短期大学）
事務局補佐：岩政伸治（白百合女子大学）
豊里真弓（札幌大学）
会計：高橋綾子（長岡技術科学大学）
平塚博子（敬和学園大学）
監事：生田省悟（金沢大学）
ニューズレター編集委員：
横田由理（広島国際学院大学）
木下卓（愛媛大学）
塩田弘（広島修道大学）
会誌編集委員：
野田研一（立教大学）
太田雅孝（大東文化大学）
高橋昌子（三重大学）
Daniel Bratton（同志社大学）
結城正美（金沢大学）
コンピューターセンター：
北国伸隆
岩政伸治（白百合女子大学）
山城 新（琉球大学）
評議員：
Bruce Allen（順天堂大学）
池田志郎（熊本大学）
石幡直樹（東北大学）
上岡克己（高知大学）
茅野佳子（明星大学）
管啓次郎（明治大学）
高橋勤（九州大学）
巽孝之（慶応義塾大学）
田中恒寿（札幌大学）
辻和彦（福井大学）
吉田美津（松山大学）
院生代表：巴山岳人（和歌山大学（非））
広報：三浦笙子（東京海洋大学）
大野美砂（東京海洋大学）
河野千絵（日本大学（非））
研究助成：
岡島成行（日本環境フォーラム）
高田賢一（青山学院大学）
乳井昌史（早稲田大学）
山里勝己（琉球大学）
村上清敏（代表）
喜納育江（副代表）

数の論理を越えて

代表　村上　清敏（金沢大学）

さる10月12日から14日の間、阿蘇の麓、九州地区九重共同研修所で開催されたASLE-Japan/文学・環境学会第14回全国大会における総会での議を経て、第四代代表に選出されました。会員の皆様に一言ご挨拶申し上げます。野田さん、山里さん、生田さんと続く歴代代表がいずれも勇武絶倫の強者であったのに対して、四代目はどうしても見劣りがします。小粒で非力さが目立ってしまいます。しかし、その責任はぼくにあるのではなく、ぼくを選んでくださった皆様方にある、というのは民主主義のイロハでしょうから、この際、無益な愚痴をこぼすのはやめにして、任期の2年間、会員の皆様のお力添えを得て、まことに微力ながら、与えられた職務を全うしたいと思っております。

先の総会の席において豊里さんが報告された「新入会者、退会者について」の資料によると、現在、会員総数は182名とのこと。この数を多いと見るか、少ないと見るか、判断の材料にしようと思い、たとえば、日本ウィリアム・フォークナー協会、日本ソロー学会、日本マーク・トウェイン協会、宮沢賢治学会などの資料を取り寄せ、会員数の比較をしようと思ったのですが、断念しました。情報の入手が困難あるいは面倒だったからではなく、情報の入手が判断を狂わせると悟ったからです。182名という数が多いか少ないか、会の設立以来その数がどのように推移しているのか、気にならないわけではありません。この先、八方手を尽くして会員数を増やしたい、とりわけ文学プロパーでない方や若い研究者の入会を促したいとの願いも強く持っています。けれども同時に、歴代代表の方々が築いてくださった貴重な伝統である――たとえば、「先生」の呼称は禁止して「さんづけ」で呼ぼうという習慣に代表される――親密で打ち解けた会の雰囲気は何物にも替え難い、との思いも頭をよぎります。問題は数ではない、のではないか。

釈迦に説法、年甲斐もなく青臭いことを申しますが、いやしくも「文学」の二文字を会の名称の一部に冠しているのですから、わたくしたちがもっとも大切にしたいのは、たとえそれが一瞬の幻覚にすぎないにせよ、心と心のふれあいであり、魂の震えでありましょう。それを言うな

ら、「環境」に関しても、繋がりこそが重要なキーワードのひとつだったはずです。

ところで、これまで全国大会の開催は、単独開催と日本アメリカ文学会に引き続いての開催を隔年でおこなってきました。会の設立当初、アメリカ文学研究者が会員の多くを占めていたといった事情がそうさせたのですが、その原則を維持するのが困難になってきたようなのです。ひとつには、先に名前を挙げた「衛星学会」と呼ばれる学会の開催が日本アメリカ文学会の前後に開催されるようになり、またさらには、教職に就いていらっしゃる方々が授業を休みにくくなったという事情もあります。今回、参加を最後まで模索してくださりながら、心ならずもキャンセルされた方が何名もいらしたことからも、今後、全国大会の開催をすべて単独開催とし、また、開催時期もたとえば8月下旬のような、比較的出やすい時期を選ぶとか、開催地についても、地方在住会員諸氏のさまざまな便宜を考慮して、東京と地方を交互にする、などの案も検討したいと思っています。皆様の率直なご意見をお聞かせいただければと存じます。

それにしても、大学を取り巻く環境の変化にはすさまじいものがあります。昇給や昇進にまつわるポイント制の導入といい、半期15回の授業＋試験の徹底といい、数の論理が席巻しようとしています。「環境正義」の観点から言うなら、こうした論理こそは、諸々の環境汚染や公害を生み出すメカニズムの元凶ではなかったでしょうか。

とはいえ、今回の役員改正にあたって、あらたに「広報」と「院生代表」を役職に加える提案をして、了承されました。会員の皆様の活躍をできるだけ把握しつつ外に向けた広報活動を盛んにし、また、若手研究者のご意見やご要望を会の運営に反映させたいとの思いからであり、ひいては、会員数の増加を目指したいとの下心から生まれたものです。二人や三人で「心と心のふれあい」をしても、「魂の震え」を実感しても、はたまた「繋がり」が実現できたとしても、老婆心ながら、それはそれで別の危険を生じさせるのではないかと危惧せざるを得ません。上に述べた至福のひとときは、多くの方々と共有できてこそのものであろう、とも思われます。その意味では、この駄文の看板には偽りがあって、「数の論理を越えて」どころか、せいぜいで「数の論理を横目にしながら」、下手をすると、軟弱この上ない「数の論理に押し流されて」に挿げ替えなければならないのかもしれません。けれども、ここは志だけは高く持って、せめて看板はこのままにさせていただき、看板倒れにならない会の運営を目指したいと存じます。

会員諸兄姉のお力添えを重ねてお願いして、代表就任の弁に代えさせていただきます。

2008年度 ASLE-Japan ／文学・環境学会全国大会報告

10月12日(日)～14日(火) 於 国立大学研修九重共同研究所(大分県玖珠郡九重町湯坪字八丁原)

10月12日から14日の間、九州地区九重共同研修所にてASLE-Japan/文学・環境学会第14回全国大会が開催された。会員による個別発表、ラウンドテーブル、招待講演に加え、昨年の金沢での「ASLE 日韓合同シンポジウム」の大成功を引き継いで、台湾、日本、香港からの発表者による「東アジアパネル」が開催された。活気にあふれた大会の模様を、それぞれのセッションごとに参加者に報告していただいた。(編集部)

環境文学についての東アジアパネル

吉田　美津（松山大学）

10月13日の午前中に開かれた「東アジアパネル」(East-Asian Panel on Environmental Literature)は、

日本、韓国、台湾、香港からの研究者による興味深いパネルであった。まず若松美智子氏は、"Ishimure Michiko's Depiction of Industrial Pollution and Minamata Disease"で石牟礼道子の「苦海浄土」三部作である『苦海浄土』、『神々の村』そして『天の海』をとりあげ、これらの三部作が水俣病を引き起こした企業の罪、そしてそれによって苦しむ人びとの悲劇、そして自然と共存した「極楽」世界への希求が描かれた作品として読みとく。『苦海浄土』では打ちひしがれた魂から発せられる言葉の中に「極楽」への願いを読みとき、そして『神々の村』と『天の海』では病に冒された人びとの受難者としての内面世界の深さを指摘する。石牟礼が苦しむ人びとの中にこの世の聖者を見出し、彼らこそが環境汚染の進む現代社会に対して人間の尊厳を示すことができると描出していると結論づける。

次に韓国のSungkyunkwan 大学のWon-Chung Kim氏は "Distopia and Toxic Discourse in Wonil Kim's 'Meditation on a Snipe' "で、1979年に出版されたKimの中編小説といえる"Meditation on a Snipe"をとりあげ、なぜこの作品が韓国におけるエコロジカルな文学の先駆的作品と見なされているかを論じてゆく。Kim氏は、朝鮮半島の分断と環境汚染の相互関係についての研究が韓国における環境文学のひとつの特徴であるとし、Wonil Kimの"Meditation on a Snipe"に描かれる産業複合都市のディストピア的現実を都市開発による環境の劣化と一つの家族の分裂を通して描いていると指摘する。作品は韓国の近代化が孕む環境問題だけではなく、我々の持つ人間中心主義的な傲慢さと限りない欲望が孕む毒をも前景化していると読みとく。

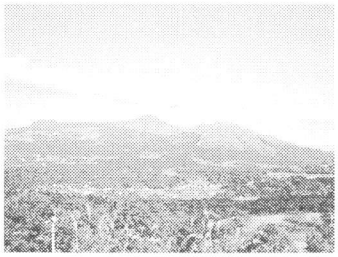
次に台湾の国立中山大学のShiuh-huah Serena Chou氏は"Writing "Nature?": A Study of Wu Ming-yi, Liao Hung-chi, and Nature Writing in Taiwan"で、1980年代の環境保護運動の隆盛と共に環境文学が誕生したことを指摘し、台湾に関する紀行文学を編集したLiu Ke-xiangや、The Society of Wildernessを設立したXu Ren-xiu、さらに台湾において初めてジャンルとしての「ネイチャーライティング」を定義した中国文学の教授Wu Ming-yiを紹介してゆく。中国語の"Huang-ye" (wilderness)や"Huan-jing" (environment)がアメリカの環境保護運動に影響を受けながら、台湾においてどのように新しい概念を取り込んでゆくのか興味深い発表であった。最後に、Hong Kong Baptist 大学のChung Ling氏は"Land and Beings in Zhang Wei's Fiction：A Case Study of Chinese Ecological Literature"で長江河口や黒竜江省、そして湖南省の地域についてエコロジカルなテーマで作品を発表している作家を紹介しながら、山東省の北部沿岸について書いているZhang Weiを論じる。Weiの*September Allegory*(1993)や*Song of Porcupine*(2007)にみられる自然と人との関係や環境劣化の問題を指摘する。

以上のように日本、韓国、そして中国からの研究者の発表は、それぞれの地域において文化的に異なる背景にありながら、開発と産業社会での人と環境の個別の問題が、グローバルな共通の問題としても捉えられることがよく理解できるパネルであった。このようにアジアからの研究者と共に、英語を共通語として文学と環境について研究成果を発表し、そして話し合えるパネルはたいへん有意義であった。東アジアの多くの環境文学が英語や日本で読める日が来ることを期待しつつ、これまでの交流をさらに深め、相互の研究活動を活発に進めていくことができればよいと思われた。

エクスカーション報告

高橋　綾子（長岡技術科学大学）

全国大会二日目の10月12日、東アジアパネル終了後すぐにバスに乗車しました。参加者は、ブルース・アレン、小谷一明、河野千絵、澤田由紀子、高橋綾子、高橋勤、豊里真弓、中島美智子、平塚博子、村上清敏、山田悠介、結城正美、横田由理、吉田美津、若杉美智子、講師のチュン・リン、キム・ウォンチャング、チョウ・シュフア・セレナ、カレン・コリガン＝テイラー夫妻です。エクスカーションの報告に先立ち、九重九州国立大学研修センター周辺をご説明します。大分県九重郡の久住連山を望む、筋湯温泉街の中に位置します。研修センター周辺は緑豊かであると同時に、至る所に温泉の白い煙が見られます。硫黄の強烈な香りがないせいか、温泉の白い煙と山々の緑が共存をしている珍しい風景でした。バスに乗り、数分で久住連山を眺めるのに格好の場所、長者原ビジターセンターに立ち寄り、クリークに思い思いに座り弁当をいただきました。13：30集合。再びバスに乗車し、池山水源に到着しました。池山水源は、阿蘇郡産山村に位置し、大野川水系玉来川の水源。湧き水の池には、石仏があり、豊かな水を守っていました。別の方向に目を配ると、石の上に亀が数匹甲羅干しをしていました。湧き出る水の美しさと緑の豊かさに、しばしうっとりとしていたように思います。掲示板には以下のように書かれていました。「いかなる年にも枯れることのない『泉』に心から感謝し、この泉に水神様をまつりました。（中略）その昔、池を清掃している時に池底から一体の水神様が掘り出されました。これは200年ほど昔に、この池を襲った大水害の際に、数戸の家屋と共に流れ出し、姿を消した水神様でした。」池の畔には、太さ1メートルほどの注連縄を巻いた一本のスギの木が池を見守るように立っていました。泉を守る池神様と神木を見てアニミズムの世界を垣間見ることができたように思います。また、バスに乗車し、すすきの柔らかな斜面と、全面にそびえる山々を見ながら阿蘇五山に向かったのでした。「山々は仏陀が横たわっている姿に形容される」と高橋先生よりご説明がありました。「仏様が寝ている？」と聞くと、なんとかしてそれを思い描いてみたのは私だけではないと思います。しばらくして、阿蘇久住国立公園に到着。昭和７年に徳富蘇峰が雄大な風景に感心して名づけたという大観峰は、海抜９３６メートル、外輪山の北に位置しており、ここから阿蘇五岳の素晴らしい眺めが望め、カルデラが雲海で覆われている絶景でした。「阿蘇山があると思っていたがそうではないことがわかった」と高橋先生にお話していた先生がおられましたが、通称「阿蘇山」は、根子岳、高岳、中岳、烏帽子岳、杵島からなる阿蘇五岳を指すそうです。参加された方々は、思い思いに散策されていました。頂上で記念撮影。16：30集合。バスに乗り、美しい風景との別れを惜しみながら研修所に向かいました。厳密にはここまでがエクスカーションですが、もう一つお話すべきことがあります。大野瀬津子さんと山田悠介さんの研究発表に引き続き、カレン先生の講演のあと、高橋先生が筋湯温泉をおよそ一時間かけてご案内くださいました。秘湯筋湯温泉街には、研修所を含めて、なんと29の温泉宿が点在しています。私たちが入湯した「うたせ大浴場」は、温泉街の中心にあり、その名の通り「うたせ湯」が有名。「うたせ」という名の通り、大浴場には、高さ３メートルほどもある「うたせ」が天井から１０本ほど落下しており、肩にあてて肩こりのための湯治を行う人、うつ伏せになる人と様々であ



りました。鄙びた「うたせ湯」にASLEの会員と一緒に入った感慨を忘れることができません。

最後に、綿密な計画によるエクスカーション、全国大会の円滑な運営をすべてお引き受けくださった高橋先生のご好意に、この場を借りて心から感謝申し上げます。このようなすばらしい久住阿蘇散策を韓国、中国、台湾、アラスカからの講師とともに体験できたことは大変意義深いことだったと思います。

研究発表報告

城戸　光世（北九州市立大学）

2008年度のASLE-Japan全国大会は、大分県にある九州地区国立大学九重共同研修所で10月12日から14日まで3日間に亘って開催された。今回は、東アジアパネルをはじめ、Colligan-Taylor氏による講演、二つの研究発表、「汚染の言説」を巡るラウンドテーブルなど、非常に盛り沢山な内容であったが、ここでは二日目に行われた、フォークナーの「熊」（“The Bear”）を取り上げた大野瀬津子氏（九州工業大学）と、よしもとばなな作品を分析した山田悠介氏（立教大学大学院）による、二つの研究発表について報告したい。

研究発表は大会二日目の夕方、フィールドトリップと総会、夕食の後に行われた。まず山田悠介氏が、「自然と人間のやりとり—『海のふた』における「くれる」と「てくれる」」と題して、よしもとばなな著『海のふた』（2006）における言語現象を取り上げた研究発表を行った。学部時代に早稲田大学で日本語学を専攻していたという山田氏は、現在立教大学大学院前期課程に籍をおいており、環境文学における文法研究を目指し、人間と人間でないものを巡る表現について考察したいと考えているという。

山田氏の発表は、よしもとばななの『海のふた』に描かれている、自然と人間の密接な関係に注目し、作中人物や作者が自然をどのように捉え表象しているのかを、言語現象（「くれる」と「てくれる」）を中心に読み解こうとするものであった。まず『海のふた』の基本情報として、現代の西伊豆の小さな町という舞台設定や、一人称の語り手「私」（まり）と「私」の母の親友の娘である「はじめちゃん」についての詳細な説明があった。その後、はじめちゃんによる海の語り（「今年は、海が私に力をくれたから、つよくそう思うの」「私は、こんなふうに海で泳ぎ続けたことなんか、なかった。だから、思い出をくれただけでも、感謝したかった」）が紹介され、作品で登場人物が用いる「くれる」「てくれる」の表現から、彼らにとって海は、①恩恵を与える存在であるが、②ウチの存在ではなくソトの存在として捉えられ、③非目上の存在とみなされている、との分析があった。山田氏は、自然を「くれる」存在として捉えるだけならば、人間は自然から「とる」ことしかできないので、それは自然を「人間に恩恵を与える存在」としてのみ認識する人間中心主義なのではないかと指摘する。確かに作品中で海は、「他者」でありながら恩恵を与えてくれる存在、非目上であると同時に神聖な存在として捉えられており、作中人物たちは自然から多くを「もらい」、豊かになっている。しかし一方で、彼らが「感謝」の言葉や祈りを自然に向けることによって、「とり」に対して「やり」も行っているのではないかという点もまた論じられた。最後に山田氏は、よしもとばななの他の作品でも同じよう

に授受動詞が多用されているのか、また、他の環境文学作品でどの程度頻出する表現なのかを調査する必要があると述べ、今後の展望を語った。

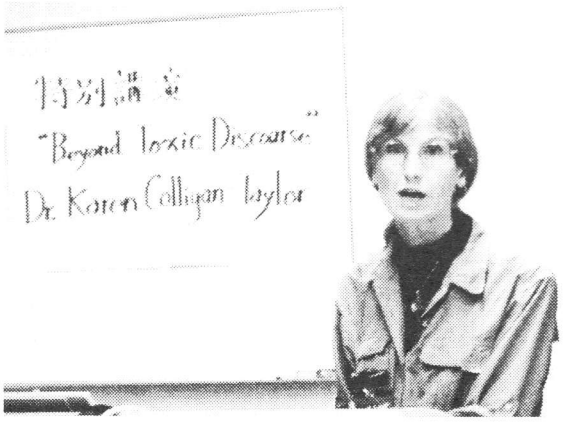
一方、もう一人の研究発表者である大野瀬津子氏は、自然と文明の対立を軸に、しばしばアイクのイニシエーションを巡るビルドゥングスロマンとして読まれてきたフォークナーの「熊」を取り上げ、「Boon Hogganbeckとハンター像のゆらぎ—"The Bear"再考—」と題して研究発表を行った。まず伝統的ハンター像として、18世紀アメリカ西部開拓のヒーローであったダニエル・ブーン（Daniel Boone）が取り上げられ、彼は野生動物を自然の一部、自然を言語の一部とみなしており、自然が主体ではなく解釈される客体として存在すると考えていたと説明された。次に新しいハンター像がアメリカ社会に浸透していた時代、19世紀後半から20世紀前半に活躍し、動物貿易の基礎を築いたカール・ハゲンベック（Carl Hagenbeck）という人物が紹介され、彼をはじめとする動物コレクターたちは、野生動物と文明の橋渡しをする専門家を自称し、動物を自然から切り離し訓練したなら文明化できると考えていたとの説明があった。

この二人の動物観を検討した大野氏は、二人に名前の似た作品登場人物ブーン・ホガンベック（Boon Hogganbeck）と動物の関係に論を進める。ブーンはライオンという名の犬の飼育係の役割を担うが、それは野生のままで動物を人間に従属させる仕事である。しかしライオンは人間であるブーンとの親和性を増していくが、その野性は失われず、逆にブーン自身が野性味を増してゆき、彼の自然と文明の媒介者としての役割が機能しなくなる。結論としてこの作品は、自然と文明の媒介者たちの消滅を描いた作品であり、それが近代化の一つの証だったのではないかと述べて大野氏は論を締めくくった。

以上今回の大会における研究発表は、二日目の朝から参加していた会員たちにとっては長く充実した一日を締めくくるにふさわしい、若い会員たちによる意欲的な研究発表と活発な質疑応答が行われ、聴衆は大いに刺激を受けることができた。今後もこのような精力的な研究発表が行われていくことを期待したい。

カレン・コリガン＝テイラー氏招待講演を拝聴して

中島　美智子（米子工業高等専門学校）



カレン・コリガン＝テイラー氏（アラスカ大学名誉教授）の招待講演"The Evolution of a New Species of Hope—Living as if What We Did Mattered"（「希望という名の新しい種の進化—自分の行動が重要であるかのように信じて生きること」）は、第２日目の取りを飾るにふさわしい示唆に富んだものであった。テイラー氏は、世界規模の環境悪化がより差し迫った問題として顕在化するにつれて、環境文学の有効性と応用性について関心が高まっていると述べられ、環境文学を出発点として、自己の価値観や倫理観、ライフスタイルを見直し、地球の未来を取り戻すために行動する必要があると提言された。そのためには１）キーとなる要素の確認（テイラー氏の場合は、日本の環境文学における環境倫理の認識）２）その認識に、科学的知識や調査を結びつけること、３）環境倫理を科学に応用し、それぞれのライフスタイルを再評価する行動を起こすこと、が重要であるとご指摘された。

テイラー氏はまず地球温暖化がいかに深刻化しているのかをさまざまな科学的データを駆使して説明された後、日本の環境文学について、次のように概観された。アニミズム、仏教の共依存性、万物相関や感謝、憐れみ、尊敬の概念は、土地倫理の発展に役立つものである。伝統的な土地に基盤を置いた伝統的なコミュ

ニティーが、宗教団体や多国籍企業や移住労働者といった基盤となる土地をもたないコミュニティーにますます置換されている。現代社会はグローバルなコミュニティーへと再構築する傾向にあるが、これは場所の理解や土地に基盤をおいたコミュニティーへの実際の関与なしでは難しい。例えば、山尾三省のような日本の環境文学者は、哲学的・倫理的な方向性や土地との相互作用へのモデルを提示しており、我々が土地と自らの関係性について考えるのに役に立つものとなっている。テイラー氏は、この哲学的な土台に自然科学の原理を加えることの重要性を強調された。

次に、テイラー氏は、宮沢賢治はかつて『農業芸術概論綱要』のなかで、「宗教は疲れて…科学は冷たく暗い」と述懐する一方で、『羅須地人協会関係稿』では、「われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学をものにできるか」とも述べていると紹介された。この言葉に衝撃を受けたのが市民科学者であった高木仁三郎とのことである。

高木仁三郎は、宮沢賢治が農民社会に身をおき、農民の視点から芸術や科学を実践しようとした姿に深く感銘し、未来への希望に基づいて科学を方向づけるという立場をとり、「よりよく生きる」から「よりよく共に生きる」ために科学が有効であるとも主張している。これに対し、テイラー氏は、科学は冷たく暗い必要はなく、高木仁三郎の言う「生活のための科学」を主張する限り、自然界への理解はより深まり、自然界を救うためにより効果的であると指摘された。アメリカでは、アルド・レオポルド、レイチェル・カーソン、E.O.ウィルソンといった科学者が倫理と科学を結びつけた良い例であるとの紹介がなされた。

さらに、倫理や科学を自然保護や再生活動に活かすことが重要ではないかと問われた。世界で最も貧困な人々や種の多様性はまさに開発途上国に存在するため、これらの問題を包括的に対応していかなければならないと述べられた。その例として、テイラー氏が挙げられたのが、自らもボランティア活動で参加した熱帯研究のための組織(OTS)である。

OTSは、特にペルーを中心とした南アメリカでの活動に従事しており、コンソーシアムの教授連は、鳥獣保護地区や国立公園といった保護地区の管理者、国や地域の政策立案者、ペルー在住の先生方などに対して提言を行っている。OTSは、フィールド研究の重要性を強調しながら、学生らにフィードワークを通して推考させ、エコシステムのつながりを自ら認識させる手助けをしているとのことであった。

また、日本では、「琵琶湖博物館」が里山やエコシステムについて習得できる格好の場所だとの紹介があったが、残念ながら学会参加者でここを尋ねた人は誰もいなかった。この紹介に関しては、多くの参加者が興味をそそられたことであろう。最後には、富沢赤黄男の俳句「結論のごとく地に蹋し蟇蛙」を詠まれ、風情に富み、エスプリが効いた修辞句でご講演を締めくくられた。

数々の貴重な写真をふんだんに盛り込み、自らのボランティア活動を通して語られた内容は非常に説得力があるものであった。全体として、厳しい現実を前に、私たちの地球環境に対する責任を持つこと、個々人における行動の必要性、ゲートウェイとしての環境文学の重要性、環境文学に科学の知識や調査を有機的に結びつけることの大切さを強調されたご講演であった。

ラウンドテーブル報告

河野　千絵　（日本大学(非)）

「現代の作家で、環境汚染の現実から免れている者はいない」—Frederic Buellのこの言葉が伊藤詔子氏によって冒頭に紹介され、今回のラウンドテーブルは汚染の現実と文学について刺激的に開始された。実現してしまったApocalypse の予言。その現実が文学として表現されるとき、どのようなメッセージが生まれるのだろうか。

結城正美氏は、水俣病の問題について医学的領域や観点からのみでなく、社会及び政治的見地からアプローチを続けている原田正純氏や緒方正人氏らの研究成果に言及しつつ、「水俣という場から思考が問われている」ことの意義をまず指摘した。続いて、石牟礼道子の作品は不知火海を「日本列島の羊水を湛えている胎」として描いており、彼女が詩的に描き出している世界観と価値とは、海水処理場として海を見る物質至上主義的な世界観とは全く異なること。さらに、石牟礼作品に登場する水俣病患者の多くが「目は見えないが耳は聞こえる」存在であることについて、目に見える世界とは汚染された現実の世界であり、一方、耳を傾ける行為によって近づける世界は、自然との密接な関係が結ばれていた汚染以前の世界なのではないか、という豊かな読みが披露された。この視覚と聴覚、それぞれが認識する世界の違いについては、カレン・コリガン＝テイラー氏から宮沢賢治の作品（「なめとこ山の熊」）との共通性 —「聴く」という行為によってより鮮明なvision が得られること — が指摘され、「耳を澄ます」ことと感覚の目覚め（世界認識の深まり）について興味深いやりとりが交わされた。

松永京子氏は、栗原貞子の詩「生ましめん哉」と林京子の小説や随筆作品を考察対象として取り上げ、産む性としての女性の立場から被爆体験が後々までどのように心理的・身体的な影響を及ぼしているか、その赤裸々な告白と時代証言の中に見出される個人的な体験の枠を越えた被爆体験の意味を検証した。栗原の詩の中に登場する女児が、その成長後に被爆二世であることから思いがけず偏見の差別を受けた事実。アメリカの女性化学者から告げられた「被爆が被爆者の遺伝子に無関係である」という「待ち望んだ朗報」に、思いがけずも「打ちのめされた」林京子が背負っていた原爆体験の重さと、その問題が一人の人間の人生に巣くった根の深さ。松永氏によれば現在もなお、原爆症の認定は困難だそうだ。核汚染と健康被害との因果関係を立証することの難しさは、環境汚染の影響の認定や証明の難しさと同一の問題であり、また同時に、そうした原爆症のもたらす影響の領域の宿命的な曖昧さは、ジェンダー問題や差別問題という非常にデリケートな社会問題の分野にまで及ぶ原因になっている、という指摘を、粛然とした思いで聴いた。

伊藤詔子氏は、新たな段階に進んだアメリカの環境文学の例としてTeri Hein、Debora Greger、Susan Antonettaら三氏の作品（Atomic Farmgirls、Desert Fathers, Uranium Daughters、A Body Toxic: An Environmental Memoir）の紹介と分析を行った。アメリカの国土の広い範囲にわたって建設されている核施設と核汚染の実情。Heinは自身の家族の物語を中心に、コロンビア川の辺に暮らす人々とその土地が受けた被曝の体験をドキュメンタリー的価値を備えた作品に著した。ハンフォードの詩人であるGreger は、ash や dust という原爆ともキリスト教とも重なる象徴的な単語を用いつつ、「revelation は牧師よりも医者からもたらされる」土地で育ってきた自身の生と魂の救いを宗教の中に模索している。文学作品として優れた完成度を持つ Antonetta の A Body Toxic は、核汚染の事実を中心に、それによって運命を決定された作者自身と作者の家族、そして国（アメリカ）という三者それぞれの物語が卓越した歴史的センスによって描き出されている。また、この作者が表現している核汚染の感覚は内面化を果たしており、その作品は環境文学の範疇に囲い込む必要はない、という伊藤氏の発言に、今後の環境文学が広がってゆく先の、一つの方向の可能性が見えるように感じられた。

偶然にも、今回の発表者三氏がそれぞれに研究対象として選んだ作家はみな女性であった。これらの作家が核汚染を語る時の言説の基底には、未来の世代をも含めた命全体への冒涜に対する怒りや混乱、それに悔しさと悲しみがある。発表後のフロアとの対話の中では、汚染の文学を対象とする場合、文学研究者の当事者性とはどうあるべきかが話題になった。記憶と記録を扱う際の違いや、対象と研究者が言葉によってどのように接点を持つべきか等、幾つかの課題や問題点が挙げられたが、いずれにしても大切なのは研究者としての主体性の確立である、という参加者の発言に襟を正す思いであった。

東アジア環境文学のゆくえ
—中国・武漢「文学と環境に関する国際会議」に参加して

森田系太郎 (立教大・院)

11月8～10日にかけて、中国・武漢で開催された「文学と環境に関する国際会議 (International Conference on Literature and Environment)」。同会議に参加する機会にめぐまれたので、以下、日本からの研究者による発表を中心に会議の様子を報告する。

初日には、開会式の後に一連の基調講演が行われた。その最初を飾ったのが、結城正美氏 (金沢大)、シン・ドゥーホー氏(韓国・江原大)、ブルース・アレン氏(順天堂大)による合同講演"Ecoliterature and Ecocriticism in Asia"であった。結城氏はまず、公式言語が三言語 (日本語・韓国語・英語) だった、2007年8月に金沢で開催された日韓シンポジウムに言及。東アジア環境文学研究のネットワーク構築の際には言語に関する議論が欠かせないと示唆しつつ、詳細については、後のアレン氏へバトンをつないだ。その後、結城氏は、東アジア環境文学研究は欧米の環境文学研究へ「東アジア」という視点を投げかけるものの、対抗理論を創出することが目的ではなく、その地域性regionalityと国際性＝世界性cosmopolitanismは相互補完的であると位置づけた。私個人は「(当面は) 対抗理論でもいいのでは？」と感じたものの、いずれにしても、東アジア環境文学研究の幕開けを告げる、その歴史に残る講演だったと考えている。

結城氏のバトンを受けて登場したアレン氏は、環境文学の世界的出版事情を総括し、英語で書かれた作品が非英語言語に翻訳される頻度の方が、その逆よりもはるかに高いことを提示。"How many works of environmental literature have been translated into English?"と問いかけた。そして、ご自身の石牟礼道子作品 (『天湖』) の翻訳経験を振り返りながら、会場の学術関係者に対して非英語言語の作品の英訳を促し、自国に埋もれたままの環境文学の名著を世界と共有するよう呼びかけた。会場は拍手の渦につつまれた。

と、ここまで書いてきて、紙幅が尽きたことに気がついた。日本からはその他、菅啓次郎氏 (明治大)、波戸岡景太氏 (明治大)、加藤ダニエラ氏 (東京工業大)、平塚彰氏 (大阪産業大)、そしてもちろん私も参加、発表を行っている。今回の発表者の参画が東アジア環境文学研究のアイデンティティ構築に貢献したのは間違いない、と確信している。他の地域の環境文学研究と同様、東アジア環境文学研究も再帰的な自己批判・制度化の回避・多様性の内包といった課題を抱えるが、だからこそ、その多難さを乗り越えた成熟に、今からワクワクしている。

淡水、阿蘇、武漢——日韓合同シンポジウムがはこんだ種

結城　正美 (金沢大学)

昨夏に金沢で開催されたASLE日韓合同シンポジウムの成果が、淡水 (台湾)、阿蘇、武漢 (中国) をはじめ、いろんなところで目に見え始めている。淡水での第4回環境文学国際大会 (５月) はニューズレター前号、阿蘇でのASLE-Japan全国大会における東アジア環境文学パネル (１０月) については本号に掲載されている

ので、このレポートでは武漢での活動を紹介する。

11月8日ー10日に武漢で開かれた環境文学国際大会では、ASLE-Japanから６名の参加があった。なかでもポスト日韓シンポ的活動として、日韓合同の基調講演と東アジア環境文学のパネルセッションについて報告したい。

シン・ドゥーホー氏、ブルース・アレン氏、結城の三名による“Contemporary Literary Environmentalism in East Asia”と題した合同基調講演では、まず結城が2005年ASLE（米国）大会での日韓合同パネルセッションに端を発する日韓環境文学研究交流の経緯を説明し、昨年の日韓合同シンポジウムでの研究交流とネットワーキングの目的と方策、そして日韓シンポ後の研究状況に触れながら、東アジア的視角とアメリカ主導のエコクリティシズムを対抗的にとらえるのではなく、両者が補完しながら（世界文学に倣い）World Ecocriticismというべき地平を目指すべきだと提案した。続いて、シン氏が韓国の環境文学研究の現状と問題点に言及しながら、英米文学研究者と韓国文学研究者との協働体制の構築が必要であると説いた。同様の状況が日本や中国にもみられることから、シン氏の提言は東アジア環境文学研究の今後をめぐる共通の検討課題であることが確認された。最後にアレン氏が、翻訳の状況や実践を例に、環境文学研究における言葉の問題を論じた。翻訳状況を見る限り、環境文学研究は明らかに英語圏支配的であること、そして非英語圏の作品の英訳が進まない限り異文化の環境観に関心が向けられず、環境文学研究の深化は困難であろうと語られた。この合同基調講演を企画した背景には、日韓を中心に形成されつつある環境文学研究ネットワークを実質的に深めたいという意図があった。会場の華中師範大学の講堂を埋めた聴衆の反応は概ね好意的で、中国の研究者から、日韓の取組を参考にしつつ東アジアの環境文学研究ネットワークを構築することは充分に可能だという意欲的な声も聞かれた（なお、合同基調講演の原稿はASLE-Japanウェブサイトに掲載予定）。

合同基調講演では35分という時間の制限上、東アジア環境文学研究の現状・問題点・展望を述べるにとどまり、具体的な作品分析に踏み込むことができなかったので、講演とは別にパネルセッションを設け、上記三名に加えて中国のリウ・ベイ氏とともに日韓中の環境文学の分析を試みた。結城の報告は、池澤夏樹のエコフィクション『すばらしい新世界』と続編『光の指で触れよ』を取り上げ、グローバルなるものとローカルなるものとのリンクを模索する〈旅人〉のスタンスを分析し、場所の感覚を特徴とする日本の環境文学に池澤作品が新たな視角を導入していることを論じた。次に、アレン氏は、石牟礼道子『天湖』の舞台となったダム湖や『苦海浄土』等で言及される国内外のチッソ工場をスライドで紹介しつつ、近代化・産業化の発展と文化や環境の消失との関係について、石牟礼の言葉を引用しつつ検討をおこなった。リウ氏の発表は、張幃(Zhang Wei)の作品における場所の感覚と動物との交感との関係性を分析し、そこで醸成される環境的コミュニティの感覚が文学空間を越えて実験的コミュニティとして実践されていることの意義を論じた。最後に、シン氏がソウル市内を流れる清渓川（チョンゲチョン）の復元事業をめぐる文学活動をスライドとともに紹介し、政府の環境政策と文学的アクティヴィズムの関係について論じた。発表後の質疑応答では、“Sense of Place”の中国訳語をめぐってリウ氏とフロアとが激しく意見交換する場面がみられ、アメリカ発の概念が中国の文学研究界に紹介される際の創造的な文化摩擦を目の当たりにしている思いがした。

武漢の国際大会は、中国における環境文学研究の勢いが肌で感じられる熱気に満ちたものだった。中国では近年、環境文学の修士プログラムが設置されたり、主要なエコクリティシズム研究書の中国語訳出版が進められるなど、環境文学研究が活発に進められているようである。1994年の設立以来研究を蓄積しているASLE-Japanの活動にも関心が向けられていた。東アジアの環境文学研究ネットワークが真に学究的なコミュニティの形成につながるよう、研究交流をさらに深めてゆきたい。

EASCLE 大会参加報告

山城　新　（琉球大学）

2年ごとに開催されるEASCLE（The Association for the Study of Literature, Culture and the Environmentの2008年の大会は10月16日から19日の日程でスペインのアルカラ・デ・エナーレスにて開催された。当地はマドリッドから南東へ約30kmの位置にある歴史的名所として知られる。15世紀に大学都市として発展したこの町は、当時最新であった印刷技術が持ち込まれ、聖書が多言語に翻訳出版され、当時のヨーロッパの学術的・文化的発信地として機能したそうである。

基調講演にはアメリカ先住民文学を代表する作家の1人、リンダ・ホーガンが招かれ、研究発表は大会をとおして35の分科会によって構成され、それぞれの分科会では3，4人の発表が含まれていた。やはりスペインでの開催らしく、午前と午後のプログラムの間に3時間、時には4時間のお昼休みがあり、参加者はその時間を利用して町を散策したり、スペイン風に習ってゆっくり昼食を取ったり、あるいは、昼寝をして時差ボケを克服したりしていたようである。結果としてプログラム全体をとおして和やかでゆっくりとした雰囲気に包まれていた。

個別の分科会や発表についていくつか紹介したいと思う。まず「ノルウェー的風景」と題した分科会におけるMari Hvattumによる発表は19世紀のノルウェー建築様式が、ドイツやフランスの建築様式の影響を受けながらも、地理学的場所の特質を「模倣」することによって「ノルウェー的」建築様式を維持し続けたという指摘は、アメリカでの類比する（アメリカ的建築様式に関する）学術的見解と比較してみると、示唆に富むものであった。また、ノルウェーの公共道路管理局の政策と実践を精査しながら、そこに審美的・実利的価値観がどのように交差しているかを考察したBeatte Elvebakkの発表では20世紀的ノルウェーの公道計画において道路が自然と人間の接点を融合させることが優先され、更に人間が車で自然を楽しめるよう審美的・機能的に設計されていると報告された。金沢での国際会議にも参加したUrsula K. Heiseの “Scales of Nature: Avantgarde and Ecocriticism” という発表では、ヨーロッパ（特にフランス）における前衛的芸術運動において「自然」あるいは「生物学的視点」がモダニズム的（あるいはポストモダニズム的）〈コラージュ〉や〈モンタージュ〉の手法をとおして、いかに重要なモチーフとして機能していたかを、フランスのドキュメンタリー映画をいくつか紹介しながら詳細に考察した。日本から唯一の参加者であった山城の発表は、ジャック・イヴ・クストーや、スティーブン・ハリガンらの作品分析をとおして、海の風景、特に「水中の風景」の描写の特質についてラカン的「死の欲動」をキーワードにして考察した。

今回の前のクラーゲンフルト大会（オーストリア）に比べて発表数が増えていたこと、特に大学院生を含めた比較的若い研究者たちの参加が増えていたことは印象的であった。結果的に大会の規模の拡大は環境文学の研究実践の多様性にも貢献していて、これからの更なる発展が期待されるところである。次回大会は2010年イギリスのバースで開催予定だそうである。

コロラド州ナロパ大学における環境教育

高橋 綾子（長岡技術科学大学）

財団法人クリタ水・環境科学振興財団の研究支援を受け、コロラド州ナロパ大学における環境教育に関してリサーチを行った。実は、ナロパ大学へ行くもう一つの目的は、ゲーリー・スナイダーより若い世代のビートの女性詩人で、ナロパ大学で教鞭をとるアン・ウォールドマンに会い、インタヴューを行うことでもあったが、本報告では割愛したいと思う。

ナロパ大学（Naropa University）は、チベット仏教のチョンヤン・ツゥルンパ・リポシェ（Chogyam Tungpa Rinpoche）が1974年に、ロッキー山脈の麓、コロラド州ボルダーに創設した私立の単科大学である。ナロパ大学は、チベット仏教の教えをもとに、宗教学、心理学、芸術創作、そして環境教育の専門分野を研究する学部と大学院があることが特徴である。ゲーリー・スナイダーの盟友のアレン・ギンズバーグはチョンヤン・リポシェに呼ばれ、創作学科の学科長に就任した。創作学科にはアメリカの全土から現代を代表する詩人たちが毎年集い、創設以来サマー・ライティング・プログラムを開催していることは文学芸術関係者に広く知られている。

ナロパ大学の環境指導者教育課程では、単に環境事業に関わる人材に知識を習得させるだけを目的としているのではなく、持続可能な社会の創出に向けて、組織やコミュニティの変革を指導する次世代の実践者を育成することにもある。そのために、全生態系を視野に入れた見方を習得し、エコサイコロジー（生態的心理学）と瞑想術（トングレン）を融合させながら、理論と実践のバランスを重要視した教育プログラムが実施されている。次の３つの具体的方策があるのが特徴である。**１．理論的学習の習得**【環境政策・環境倫理・心理学】**２．指導者の技能の取得**【瞑想技能・コミュニケーション技能の向上】**３．人間と自然の関係の理解**【自然体験・地域体験】これらは、「知」、「技」、「体」でもあり、相乗的教育効果を促す方策である。スナイダーの『野性の実践』や、ジョアンナ・マーシー、ジョージ・セッションズ等のディープ・エコロジストの著作が学生に課された必読書である。調査協力者である、シェリー・エルムス教授の研究室の卒業生は、ジョージア州の森林局の専門員、テネシー州で心理カウンセラーとして活躍している。これは、人や自然に対して公正な判断力を持ち親和的に接することを促した教育効果と言えうるだろう。伊藤詔子氏は「環境教育――日米の大学の環境文学教育制度」（『文学と環境』第３号）において、環境教育においてエコロジカル・アイデンティティーの育成が目標とされると指摘されていた。ナロパ大学の環境教育は、多文化を融合させた理論と実践を重視しながらエコロジカル・アイデンティティーを確立させ、人間だけでなく、地球環境に新しく接近できる人材育成を行っているのである。（社団法人日本環境教育フォーラム機関紙『地球のこども』2008年10月号、11月号に掲載された内容を改訂したものである）

現代ネイチャーライターの横顔（10）

“樹”の視点から現代を見る　現代詩人　長田弘（おさだ）

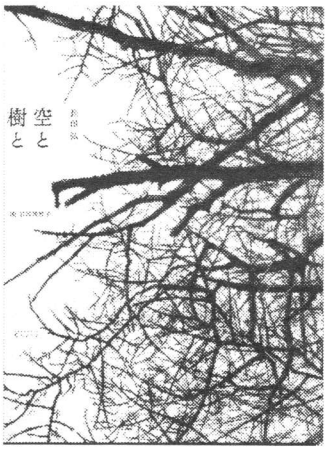
澤田由紀子（甲南大学(非)）

日本の現代詩人、長田弘（1939～）は、六十年代から詩作を始めている。モダンジャズや映画、ボブ・ディランなどの同時代の歌詞に共感し、フルブライト基金を受けて客員詩人としてアイオワに滞在したのを機

に、以降折々にアメリカ大陸をめぐり、アメリカの現代を切り取るエッセイなども著している。また広範な読書を活かしたエッセイや評論、絵本や翻訳等でもよく知られている。戦後詩のいずれのグループにも属さず、言葉と世界について書き続けてきた。詩「世界は一冊の本」等がよく知られている。その長田弘のここ数年の詩集の表題に“樹”という共通の視点が提示されていることに、私は特に着目している。詩集『人はかつて樹だった』(2006、みすず書房)、そして詩画集『空と樹と』(2007、エクリ)が相次いで出版された。『空と樹と』は’84年以降の“樹”を巡る詩編七編、2007年の新作二編が、日高理恵子のモノクロームな、しかし生き生きとした樹の画とともに編まれたものである。

長田の世界における“樹”はかくのごとく語る。「この場所で生まれた。この場所で／そだった。この場所でじぶんで／まっすぐ立つことを覚えた。／空が言った。――わたしは／いつもきみの頭のすぐ上にいる。――」(「樹の伝記」『人はかつて樹だった』)土地に根差し、「この場所」で育ち、学び、老いてゆく“樹”。その姿を自らに重ねるように「老いるとは受け入れることである。／あたたかなものはあたたかいと言え。／空は青いと言え。」(前掲詩)と、いまは老いた“樹”の心情を語る。そこには、自然の有り様を“樹”として表象し、対照的に人間の世界への関わりを「人ひとりいない風景は、／息をのむようにうつくしい。」(「世界の最初の一日」前掲書)とも示すが、「祈ること。ひとにしか／できないこと。祈ることは、／問うこと。みずから深く問うこと。／問うことは、ことばを、／握りしめること。そして、／空の、空なるものにむかって、／災いから、遠く離れて、／無限の、真ん中に、／立ちつくすこと。」(「立ちつくす」前掲書)と人だけの役割について述べ、人がどのように自然のなかに存在しうるかを問うている。

長田は詩集『人はかつて樹だった』の執筆の背景について、がんの告知を受けた家人に付き添う自らが「樹のように、ただここに在るほかない」日々に編まれたものと述べている。しかし、長田の“樹”への眼差しは本詩集以前からのものである。’72年の初渡米以降、詩集を携えて北米の町々をめぐる日々に、それ以前の放恣な読書遍歴の中にも存在していたのである。現在も読者を増やしている詩集『深呼吸の必要』(’84年出版、2004年に映画の題としても使われた)には次のような詩がある。「おおきな木をみると、立ちどまりたくなる。／(中略)／おおきな木の下に、何があるだろう。何／もないのだ。何もないけれど、木のおおきさ／とおなじだけの沈黙がある。」(「おおきな木」)この詩は『空と樹と』にも再録された。“樹”とその背後にある沈黙は、世界の豊かさを感受した瞬間の記録でもある。詩画集『空と樹と』においては、ホイットマンのうたったルイジアナの孤独な槲の木は、樹の下にたたずむものに「みずから問う」生き方の姿勢を質すのだと同じく述べている。「樹の下に佇む人」というモチーフは長田の詩に繰り返し登場する。その原体験を詩「なつかしい神の木」では、少年であるわたしが神社の古い木立の中で過ごした時間と、その時に木立から「澄んだ空気のように音もなく、見えないものがシャワーのように降ってき」た体験から得た「感覚のひろがり」として語っている。樹が神であり、たとえ枝を広げたその樹が刈り落とされても魂の中にその樹は存在すると長田は述べる。これはたとえ街にあっても、自然とどう向き合うか、自然をどう内在化させるかを我々に示すものである。



またこのような自然への向き合い方の基盤には、豊かなアメリカ詩の享受、特に現在環境文学に取り上げられる作家・詩人の作品が横たわっている。長田弘のエッセイ集『詩は友人を数える方法』(1993)では、「詩人は引用されるために存在するのであって、語られるためにではない」とのハンナ・アレントの言葉に添って、アメリカ大陸をめぐるロード・ムービーならぬロード・エッセイの中に、ソロー、ウェンデル・ベリー、アーシュラ・K・ル＝グィン、アニー・ディラード、レスリー・マーモン・シルコウ、ネイティブ・アメリカン達、その他有名無名の詩人の詩を旅の友として引用する。講談社文芸文庫版の解説で亀井俊介は、これらの詩はネイチャーライティングに通じる詩であると述べ、『詩は友人を数える方法』という書は、芭蕉『野ざらし紀行』の長田版とする。長田は本書で、詩と旅によってネイチャーライティングを可能にしているといえる。

院生組織の活動

巴山岳人（和歌山大学（非））

院生組織の代表の巴山と申します。この度、院生組織代表をASLE－J役員の一人として任命していただきましたことに深くお礼申し上げます。院生組織がASLE-Jにさらなる貢献ができますよう努めてまいります。

院生組織は現在9名で活動しておりますが、メンバーの高齢化（！）に伴い、院生に限らず、非常勤講師の方々の御参加も募ることになりました（私も10月より、非常勤講師の身分となりました）。最近の活動は、メーリングリスト上での読書会の継続（Rachel Stein, ed. *New Perspectives on Environmental Justice* [2004]）、ASLE-JのHPにあるキーワード集の執筆準備、そして来年の全国大会でのワークショップの企画などです。

院生組織メンバーの何人かは、非常勤講師として大学で（主に語学の）授業を担当しております。環境批評においては環境教育も大きな柱の一つであり、そうした要素を授業のなかに（やや強引に）取り入れているメンバーもいます。以下では、巴山と、同じく非常勤講師をしている佐々木とが、語学の授業への環境教育の導入、特に映画の使用について議論した結果をまとめます。

環境教育の代表例としては、環境問題を取り上げたテキストの使用が挙げられます。近年、エコロジーを取り上げた多くの英語教科書が出版されています。本学会でも、ASLE－J編『環境の未来—日本からの提言（*Echoes of the Environment*）』（音羽書房鶴見書店、2000）をはじめとして、多くの先生方が教科書執筆に携わっておられます。これらのテキストは、身近な環境問題から、地球規模での環境破壊まで紹介するもので、エコロジーについての様々な知識を提供してくれます。一方、私は、VOAのニュース素材を下地にしたテキストを用いています。

しかしこれらのテキストには、難解な専門用語が頻出することで難度が高くなること、環境問題にまつわる言説はメディア上に溢れかえっているため、学生の関心をそれほどひきつけないという弱点もあります。環境問題の現状と対処法を単に提示するだけでなく、自然や環境のあり方について、学生に主体的な思索を促すことも大切です。そこで文学研究者としては、環境文学をテキストとして使いたくなるのですが、英語の難易度という点で、対象学生が限られるという問題が残ります。

ここで環境問題を扱った映画を副教材とすることは、学生の興味を引く点でも、また音声と動画と組み合わせて複合的に英語を学ばせる点でも、有効であるように思えます。近年、エコロジーをテーマとした多くの映画が公開されています。最近のものでは、『不都合な真実（*An Inconvenient Truth*）』（2006）、『ミス・ポター（*Miss Potter*）』（2006）、そして『アース（*Earth*）』（2007）などが挙げられます（『デイ・アフター・トゥモロー（*Day after Tomorrow*）』（2004）は娯楽性が強すぎますし、『ダーウィンの悪夢（*Darwin's Nightmare*）』（2004）は、クラスの雰囲気を重苦しくしないかと心配です）。

『不都合～』は地球温暖化のメカニズムを、非常に分かりやすく説明しています。問題の所在を明確に提示しており、学生の環境意識を喚起する効果が高いといえます。A・ゴアのスライド講演は、英語によるプレゼンの参考にもなります。また、政治性や、科学データの信憑性の問題についてもふれることで、学生に環境倫理の構築性について考えさせることもできます。

『ミス・ポター』は、娯楽性が高い映画ですが、ヴィクトリア朝の博物学の流行や、ナショナルトラストに代表される初期環境保護運動といった歴史的側面、さらには「女性または階級と自然」や「田舎と都会」といった問題系へと話題を広げていくことができます。ピーターラビットの原著を同時に使用してもいいでしょう。ただ残念なことに、英語のスクリプトがDVDには入っておらず、リスニングで使用する際には準備に手間取りそうです。

『アース』は、その迫力ある映像が多くの学生を惹きつけるようです。またナレーションの英語も簡潔かつ分かりやすく、ディクテーションなどで利用できそうです（こちらにもスクリプトがないことが残念ですが）。さらに、人間の語りによる自然の擬人化、映像のサブライム性、「自然」の消費などについて問題提起することができます。

語学の授業で映画を頻繁に扱うのは困難ですが、学生の反応からも、上記の映画が環境教育に役立つことは確かです。こうした経験を踏まえ、将来的に自分達の手でテキストを作成するということも、院生組織の大きな目標として掲げています。

＊院生組織の活動にご興味をもたれた方（大学院生・非常勤講師）で、参加を希望される方は、巴山までご連絡下さい。（gaku_h1216@hotmail.com）

書評

書評　原田詠志斗著『アイヌの治造―ふたりの男が出会わなければ、生まれなかった物語』（『アイヌの治造』刊行会、2003）
さとうち藍著　関戸勇撮影『アイヌ式エコロジー生活―治造エカシに学ぶ、自然の知恵』（小学館、2008）

茅野佳子　（明星大学）

2007 年 11 月 3 日と 4 日の 2 日間、中野駅北口の公園で開催されたチャランケ祭り（1994 年に始まったアイヌと沖縄の合同のお祭り）に初めて参加した。1 日目の午後、この場所で祭りが行われることをこの地のカムイ（神）に告げて祈るため、アイヌの儀式カムイノミが行われ、その中央にひときわ目立つ見事な白い髭の「エカシ」（アイヌ語で「長老」の意）がいた。それが治造さんだった。そして翌日、会場の展示・販売デスクで見つけた本が『アイヌの治造』だった。

1938 年に北海道浦河町に生まれ、小さい頃から畑や狩猟の仕事を手伝う中で、自然との付き合い方や生きる力を身につけた浦川治造さんは、40 代半ばで上京し、様々な仕事を転々とした後、ラーメン業を営んでいた。そのときに、建築士であり環境デザイナーとして活躍していた原田詠志斗さんと偶然出会い、親交を深めていったことで、この本は生まれた。激務のかたわらインタビューを重ね、北海道にも足を運び、資料を集め、原稿を書き上げた原田さんは、その直後に急逝され、その遺志を継いだ支援者により本書は刊行された。

幼少年期の四季折々の暮らしぶりに始まり、学校、就職、結婚を経て上京し、解体業を起こして家族を呼び寄せた半生、熊や鹿をめぐる武勇伝や、「ポロチセ」（大きな家）を建てて海外からの先住民をもてなした話などが、治造さん自身の言葉で語られ、苦労をものともしない前向きで力強い生き様を伝えている。同時に『アイヌの治造』は、現代を生きる一人のアイヌの生活と体験を通して語られるオーラル・ヒストリーとして、またアイヌ文化の記録としても、貴重な資料となっている。

その後も活躍を続ける治造さんの様子を、自然とともに生きるアイヌの知恵とその根底にある世界観に焦点を置き、最近の先住民族をめぐる国内・国外の動きを織り交ぜながら、鮮やかな写真とともに紹介した『アイヌ式エコロジー生活』が、2008 年 7 月に刊行された。洞爺湖サミット直前、北海道でアイヌの人々の主催する先住民族サミットが始まろうとしているときだった。この本は、「カムイと生きる」というタイトルのウェブマガジンの連載記事をまとめたもので、自然ジャーナリストである著者のさとうち藍さんは同タイトルでの出版を希望していたが、出版社の強い意向で『アイヌ式エコロジー生活』になったそうだ。しかし、写真と文章によって本書が描き出す治造さんの生き方からは、現代の「エコロジー」という言葉では表しきれない、森羅万象に「カムイ」の存在を認めて生きるアイヌの伝統的な世界観が伝わってくる。

ヤナギの白い枝を巧みに削って「イナウ」（神々が好むとされ、儀式に欠かせない供え物）をつくる治造さん。サケ捕りの時期に河原に木の枝を組み合わせてつくって見張りをしたという「クチャ」（三角形の小屋）を建ててみせる治造さん。ケヤキの木をくりぬいて臼をつくる治造さん。1 本の丸太から「ポンチプ」（小さな舟）をつくり、トラックで故郷浦河町に運び、川で「チプサンケ」（進水式）のカムイノミを行う治造さん。合間に紹介される治造さんの言葉は、植物や木や生きものに関する知識に溢れ、与えられたものに感謝し、無駄にしない生き方を教えてくれる。後半では、許可を得て浦河町の元浦川で行ったサケ漁の様子と、捕れたサケを余すところなく調理する方法や、伝統的なアイヌ料理の数々を紹介しているが、役所に申請し許可を得なければ、アイヌの生活・文化にとって大切なサケを捕ることのできない現状も浮かび上がる。

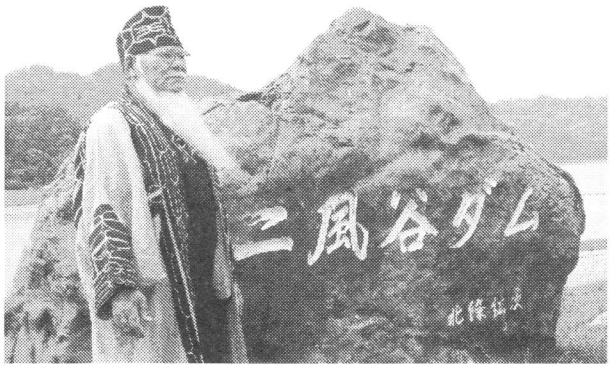
『アイヌの治造』の最後の方に書かれていた廃材の再利用という治造さんの夢は、千葉県君津市亀山湖付近の山あいの土地を借りて建設中のアイヌ文化伝承施設「カムイミンタラ」（アイヌ語で「神々の遊ぶ庭」という意味）という形で実現しつつあるのだが、2005 年にその一部が完成したときに、海外の先住民のゲストを迎えて行われ

た儀式の様子が、写真とともに紹介されている。こうして世界の先住民族が交流し、お互いに大きな力を与え合ってきたことが、2007年9月の「先住民の権利に関する国連宣言」採択につながったともいえるだろう。

2008年5月には「カムイミンタラ」で、北海道の鵡川アイヌ文化保存会と海外からのゲストによる文化交流会が開かれ、多くの人々が訪れて、アイヌ料理と民族の音楽や踊りを楽しんだ。そこにはうれしそうな治造さんと多くの支援者の姿があった。7月の先住民族サミットでも、治造さんのまわりにはいつも大勢の人が集まっていた。『アイヌ式エコロジー生活』は、カムイとともに生きる治造エカシの魅力とアイヌの知恵がいっぱい詰まった、宝箱のような本である。

追記（1）2008年7月1日から4日まで、先住民族サミットに参加しました。アメリカの雑誌 *The Green Horizon Magazine* (fall 2008) に載ったサミット報告（英文）をお読みになりたい方は、茅野 (kayano@eleal.meisei-u.ac.jp) までご一報ください。添付ファイルでお送りします。
追記（2）治造さんを始め関東に暮らす多くのアイヌの人々の姿と声を伝えようと、ドキュメンタリー映画「TOKYOアイヌ」の制作が進められ、支援を求めています。詳細は下記の「カムイミンタラ」ウェブサイトをご覧ください。

関連サイト： カムイミンタラ http://www.kamuymintara.com
先住民族サミット http://www.ainumosir2008.com



平取町二風谷ダムの碑の前に立つ治造さん（撮影 茅野）

書評 Timothy Morton, *Ecology without Nature: Rethinking Environmental Aesthetics* (Harvard UP, 2007)
Barbara Kingsolver, *Animal, Vegetable, Miracle: A Year of Food Life* (HarperCollins, 2007)

山城 新（琉球大学）

近年出版される研究書や学会等の研究発表をとおして観てみると、2003年に出版されたDana Phillipsの *The Truth of Ecology* 以降、米国エコクリティシズムは一つの転換期を迎えた印象がある。この著作においてPhillipsはエコクリティシズムの理論実践で用いられていた科学的用語や概念やテキスト解釈の方法について、現代批評理論を駆使して徹底的に批判した。もちろんPhillips以前にもエコクリティシズムやネイチャーライティングを語る時の言葉が過度に「神秘的」、「楽観的」、「感覚的」であるといった批判はあった。（そしてそのようなシニシズムは日本における環境文学研究への視線にも当初から存在していたと推測する。）Phillipsに対しての批判も存在するが、顧みて *The Truth of Ecology* によって現代批評理論と環境的言説の関係性についての本格的な理論的対話が始動した印象がある。例えば、環境的言説はモダニズム・ポストモダニズムに対して従属するのか、あるいは包摂する・されるものなのか。そうして環境文学研究はASLE内部の自己完結的文脈ではなく、現代文学・文化研究理論の枠組みで論じられるようになったように思える。

Timothy Mortonの *Ecology without Nature: Rethinking Environmental Aesthetics* (Harvard UP, 2007)はそのようにして書かれた本である。Mortonが試みるのはこれまでのエコクリティシズム関連用語のリセットである。“nature,” “environment,” “nature writing” や ” ecocriticism” 等、環境文学言説の受容の限界はこれらの用語に起因するとし、代わりに、“ambient poetics” や“ecomimesis”あるいは “dark ecology”等のソーシャルエコロジーやヨーロッパ美学理論から援用される概念を用いる。しかしながら、一方で自身のアプローチを同時にエコクリティシズムの理論の一つだと位置づけることによって、エコクリティシズムを内部から援

護し、他方で外部から批判する。イギリス・ロマンティシズム文学の専門家として英詩を中心に論じつつも、『森の生活』『フランケンシュタイン』『ブレードランナー』『ロード・オブ・ザ・リング』に至る現代大衆文化のあらゆる表現形式へ縦横無尽に思考を巡らせる。

Mortonのポストモダニズム理論と意外に親和性があるのではないかと思うのが、Barbara Kingsolverの *Animal, Vegetable, Miracle: A Year of Food Life* (HarperCollins, 2007)である。小説家として主に知られる彼女の最新作は、家族が新しく郊外へ引っ越し、半ば自給自足の生活をした 1 年間の記録である。例えば、食料がどのように作られ、流通され、そして消費されるかを、自らの生活をとおして観察するその「自然」との近接感はMortonが“conservative”と呼ぶネイチャーライティングやエコクリティシズムがもつ抽象的関係性や概念性より好ましいものだろう。そしてこの中に「自然」は「自然」という概念で表現されることはなく、多くは食料として、である。この本は夫Steven L. Hoppと娘Camile Kingsolverとの共著になっており、夫は環境学者として短いコラム、娘もエッセイとレシピを掲載している。筆者のナラティブをバックボーンとして家族のそれぞれの「自然」への関わり方が有機的に繋がっている。必ずしもそのタイトルだけではなく、ナラティブ構造と「自然」への関わり方についても、ソローの『森の生活』が意識されているのは間違いない。MortonとKingsolverの間に確かに親和性があるとすれば、Mortonの問題視したネイチャーライティングとエコクリティシズムの感覚的で楽観的エコロジーは、既にKingsolverのような作家たちには認識されていて、解決済みだったのかもしれないとも考えされられる。

書評『言霊』石牟礼道子・多田富雄往復書簡（藤原書店、2008）

若松美智子(東京農業大学)

本書は作家・詩人石牟礼道子と免疫学者・新作能作者・多田富雄の往復書簡から成っている。

『苦海浄土』3 部作を 30 年かかって書き上げた石牟礼道子氏は、パーキンソン病という神経性の難病に苦しみつつ、新作能『不知火』を水俣病の死者たちのために奉納した。一方免疫学の権威として数々の賞を受賞した多田富雄氏は、『生命の意味論』『免疫の意味論』をはじめとする科学書において、今日の哲学界・思想界に刺激的な生命観を提示した。また若いころから能の研鑽を積んだ彼は新作能作家として、広島の「鎮魂」を描いた『原爆忌』、長崎の復活を描いた『長崎の聖母』、沖縄戦の悲劇を描いた『沖縄残月記』の 3 部作を完成させ、さらにアインシュタインの世界を描いた『一石仙人』や、臓器移植を描いた『無明の井』を上演するなど、異色の知識人で ある。その彼はこの書簡を交換する間、脳梗塞による右半身の麻痺、重度の言語障害、前立腺癌の手術と院内感染などに苦しみぬき、肉体的苦痛の極限状況にあった。その中で発せられた、石牟礼道子との魂の交感がこの『言霊』という題名のありかをうかがわせる。

石牟礼氏も多田氏もそれぞれの世界でまぎれもない重鎮であり巨人である。この本はその強く大きな魂が、互いへの敬意から発する貪欲なまでの知の交換のほとばしりである。多くの仕事を成し遂げた 2 人が、いま難病という壁にぶつかり、肉体という現象世界の果てにあって、より一層の創作意欲に燃える魂のあり様は、ただならぬ魂魄の邂逅と言うべきである。生きる世界が全く異なるように見える二人の共通の話題は、受苦ということ、能の世界、および弱者の側から見る権力の非道への怒りである。「末期(まつご)の目を通して双鯉をかわす」巨人の魂の言葉は現代をえぐり出す。

小泉政権の医療費削減によるリハビリ打ち切り改定には「単に弱者、障害者を医療から切り捨てるという政策以外に、何かもっとまがまがしいものが含まれている」と怒り、リハビリ上限日数 180 日という悪法の撤廃運動に取り組む多田富雄と、「水俣のかくも長きにわたる意図的放置。高度経済成長の裏側に排出され続けたおびただしい産業廃棄物の不知火海への無処理投入」を官僚機構に巣くうアウシュビッツとみる石牟礼。

石牟礼のうちに深い慈悲の姉性を認め、自己の苦しみを受け止めてもらい、書簡をしたためる中で病を克服す

る多田と、多田の作能から多くを学びとりさらに能を書くことに意欲を燃やす石牟礼が、書簡を通して互いに魂の深いところで創造力をこだまさせ高めあう。81 歳と 74 歳という高齢と、難病という肉体上の苦痛を超越して、さらに高まり燃える精神の実りの豊かさ高さに心打たれる書である。

Ishimure Michiko, *Lake of Heaven* (天湖) Published in English

Bruce Allen (順天堂大学)

The English translation of Ishimure Michiko's *Lake of Heaven* (天湖) was published in October by Lexington Books. This represents an event of particular note for ASLE-J, both because of our long-standing association with Ishimure Michiko and because of the strong support this project has received from ASLE members in Japan and the US. The translation was originally commissioned by the Japan and US branches of ASLE at our first International Symposium held in Hawaii in 1996, at which Ishimure-san was a featured guest artist-speaker. At that conference we noted the lack of contemporary Japanese environmental literature available in English translation and selected *Lake of Heaven* as a representative work for translation.

Lake of Heaven was originally published in Japanese in a serialized edition in 1996 in the journal *Shukan Kinyobi*. It was then revised and released in a book edition in 1997, published by Mainichi Shimbun Sha. The work tells the story of a village in the mountains of Kyushu that was sunk to make way for dam construction. It deals with the effects of dam construction and the larger process of rapid modernization on the villagers, their culture, and the natural environment. While the work is fiction, it is based on Ishimure's extensive conversations with local Kyushu residents and her recordings of the stories of the people who were displaced in the wake of dam construction. It exposes the deep strains between traditional local cultures and the forces of urbanization and modernization. Ultimately, the story leaves a hope for reconciliation and restoration among human and natural communities through a rebirth of local culture, stories, and a renewed attention to the natural world.

Although *Lake* can roughly be classified as a novel, it has strong roots in local traditions of storytelling, myth, dream, and noh drama. Gary Snyder, who gave strong support for the project by reading and commenting on the translation, as well as by assisting in the efforts to find a publisher, calls *Lake* "a remarkable text of mythopoetic quality, with a Noh flavor, that presents much of the ancient lore of Japan and the lore of the spirit world, and is in a way a kind of myth-drama, not a novel." The story becomes a parable for the larger world "in which all of our old cultures and all of our old villages are becoming buried, sunken, and lost under the rising waters of the dams of industrialization and globalization."

Central to Ishimure's hopes for the revitalization of culture and environment is her call for the revival of communities of sharing. Thus it is fitting that the translation of *Lake of Heaven* has been made possible thanks to such extensive support from the ASLE community. Many have assisted in reading and commenting on the manuscript and have helped with other aspects of the publication. As the translator, I would like to state my deep appreciation for this support.

Note: The English translation of *Lake of Heaven* is available in both hard and soft cover editions from Lexington Books, a division of Rowman and Littlefield Publishers.

広報からのお願い

2008年5月の役員会で、新しく「広報」という担当が設けられました。ASLE-Japanの活動を海外に発信すること、会員の研究活動を集約することの２つが主な仕事になります。年に2回のニューズレターに「会員の活動」という欄を設け、会員諸氏の研究や社会活動情報を集約して会員の間の交流をいっそう活発にするのが目的です。
さっそくですが、会員の皆様からニューズレター26号に掲載する活動情報をお知らせいただけますようお願いします。2008年10月から2009年3月までの活動について、河野千絵（UA6C-KUN@j.asahi-net.or.jp）までお知らせください。締め切りは、2009年4月1日とさせていただきます。

書式の統一が必要なため、恐縮ですが、項目（著書、学術論文、書評、エッセイ、学会発表、講演、国際会議出席、運動活動、その他）に分け、項目ごとに年代順で並べ、下記の書式で送っていただきたいと思います。

（著書、学術論文、書評、エッセイ）
英語のものは、MLA最新版に従ってください。
日本語のものは、著書の場合、
編・著者名（共著者名）、題名、出版社、出版年
学術論文などは、
編・著者名（共著者名）、題名、著書・雑誌名、出版年、ページ
（学会発表、講演）
発表者名（共同発表者名）、題名、学会・大会名、開催地、発表年月日
（国際会議出席、運動活動など）
参加者名、会議・活動の名称、参加年月日のほか、内容を簡単にお知らせください。運動活動は、主導の活動でなくても結構です。

いずれは、会員の皆様のこれまでの業績をより広く集約することを考えております。資料整理の段階で、もし必要な場合には、内容に関する補足的な情報のご提供をお願いするかもしれません。その際にはどうぞご協力をよろしくお願い申し上げます。

広報委員　三浦笙子　大野美砂　河野千絵

事務局より

2008年度ASLE-Japan ／文学・環境学会全国大会総会のご報告

2008年10月13日（月、午後5:00〜5:30）大分県の九重共同研修所にて、2008年度総会が開かれました。まず、審議事項として、2007年度一般会計及び日韓合同シンポジウム会計報告、2008年度予算案、役員改選および役員の新設（広報委員および院生代表）案、新設の役員に係る会則改正案、新顧問案、分科会内規案、2009年度全国大会案および第2回ASLE日韓合同シンポジウム開催へ向けた準備状況、さらに、エコクリティシズム研究会の分科会資格の返上について担当役員より説明があり、審議を経て了承されました。続いて、2007-2008年度活動、会誌やニューズレターの発行と今後の課題、現会員数（182名）、分科会および院生組織の活動、ASLE-Japanウェブサイトのリニューアル、2008年度会員名簿の作成についての報告がありました。

2009年度ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会を山梨県清里で開催します

と　き：2009年8月29日（土）ー8月31日（月）の予定
ところ：財団法人キープ協会 清泉寮 （〒407-0311 山梨県北杜市高根町清里3545：TEL:0551-48-2111、ホームページ: http://www.keep.or.jp/）

研究発表、ラウンドテーブル、シンポジウムを募集します。タイトル、発表内容（800字程度）、連絡先を、大会実行委員長（仮）の野田研一さん（立教大学）までお送り下さい。

送付先：東京都豊島区西池袋3-34-1　立教大学異文化コミュニケーション研究科　野田研一
締 切：2009年4月27日（月）

会費納入のお願い

2008年6月30日発行のNLに添えて、会費納入のお願いを致しました。会費未納の方は、至急、下記郵便口座へお振込みください。（一般5,000円、学生2,000円）

口座番号　01300-0-93821

加入者名　文学環境学会

寄贈図書

次の図書を学会に寄贈していただきました。お読みになりたい方にはお貸ししますので、事務局までご連絡ください。なお、送料はご負担ください。

・エコクリティシズム研究会 『エコクリティシズム・レヴュー』 No.1、2008.
・日本アメリカ文学会関西支部編 『関西アメリカ文学』 45号、2008.

【編集後記】

新しい編集体制になってお送りする第２５号は、九州で行われた第１４回全国大会の報告を中心とした。諸般の事情で参加できなかった方、一部しか参加できなかった方にも、大会報告をお書きいただいた方々の詳細なご報告で、大会の様子を知っていただけるのではないかと思っている。阿蘇の雄大な眺めとご家族とともに大会のためにご尽力いただいた高橋勤氏のご奮闘ぶりは参加者の記憶に残っていくことだろう。この第２５号以降も「現代ネイチャーライターの横顔」と「院生組織の活動報告」は引き続き掲載していくこととした。最後に、ご多忙の中、ご執筆いただいた方々、色々とご提案いただきご協力いた方々に心より感謝申し上げたいと思う。(Y.Y.)

【発行】
ASLE-Japan/文学・環境学会
代表　村上清敏
事務局:県立新潟女子短期大学　小谷一明
〒950-8680 新潟県新潟市東区
海老ヶ瀬471番地
Tel:025-270-3351
Fax: 025270-5173
E-mail:kodani@da2.so-net.ne.jp

【編集】
編集代表　横田由理
〒739-0321
広島市安芸区中野6-20-1
広島国際学院大学
E-mail:yokota@hgk.ac.jp